



うつろ舟

澁澤龍彦

福武書店

UTSUROBUNE
©1986 Tatsuhiko Shibusawa
Printed in Japan

澁澤龍彦
うつろ舟

*

1986年6月16日第一刷発行
1986年7月30日第二刷発行

発行者 福武總一郎
発行所 株式会社 福武書店 〒102 東京都千代田区九段南 2-3-28
電話 東京(03)230-2131 振替 東京 6-105097
本文印刷所 精興社
表紙・扉・函印刷所 栗田印刷
製本所 加藤製本

定価 1600 円
ISBN 4-8288-2197-X C 0093
NDC 913 194 260 p
落丁・乱丁本はお取り替えいたします

Fukutake Shoten, 1986

うつろ舟
目次

髑
髒
盃

109

花
妖
記

75

魚
鱗
記

43

護
法

9

菊
燈
台

137

髪
切
り

169

う
つ
ろ
舟

189

ダ
イ
ダ
ロ
ス

227

裝
丁
菊
地
信
義

うつろ舟

護
法

鎌倉は泉ヶ谷の奥にある浄光明寺の塔頭たつおんの一つに、智菴和尚の開基になる華藏院という坊があり、この坊の庭に、いまは荒れはてて見るかげもないが、仏法弘通の世にはさだめて善男善女の恐怖心をあおったにちがいない十王堂があった。五間四面の堂の中には彩色の剝げおちた、くろぐろとした冥府十王の木像がずらりとならんでいて、仏法のすたれた今日このごろ、そのあたりにはだれも近づくものがない。伝説によれば、この十体の木像はそのかみ文覚上人が京の清安寺から背負ってきた鎌倉へ移したもので、いかに文覚上人とて一つしかない自分の背中には木像一体しか背負うわけにはいかぬだろうから、十体すべてを移すには京と鎌倉のあいだを都合十回往復したということになる。御苦勞さまというほかないが、そう思うのは後世の信心うすきともがらで、文覚上人のあざかり知るところではあるまい。

十王堂は夜になると、冥府に引き出された罪人どもの拷問の声が聞えるというので、

この寛政のころには、ひとびとといよいよ足を向けることをはばかりようになっていたが、これも信心のためというよりはむしろ怪談をこのむ当時の世相を反映したものと見たほうが当たっていたかもしれない。

あるとき、長谷観音前のうなぎ屋の二階にあつまって、芸者をあげ酒を酌みかわしていた鎌倉近在の悪たれめいた商家の子弟が、談たまたま化けものばなしにおよぶと、そのなかのひとりが彦七という男に向って、笑いながらこんな冗談をいった。「どうだい彦さん、きみは日ごろから化けもの心やすくしているようだが、今夜、あの泉ヶ谷の十王堂へ行って、文覚上人みたいに十王の木像を背負ってくる勇氣があるかい。十体のうちのひとつ、どれでもいい。もし背負ってこられたら、そうさな、みんなできみのために一席もうけてやってもいいぜ。ここにいる女たちも証人になってくれるだろう。」

大森彦七と同じ名前だが、この彦さんと呼ばれた男、かならずしも化けものとなつねづね昵懇にしているというわけではなかった。ただ、近所でお化けというあだ名で通っている漢学の先生について、商家の子弟にしてはめずらしく、儒学やらなにやら勉強しているらしいのを知っていたから、その仲間のひとりが「化けもの心やすくしている」といって、彦七をからかったまでのことである。じつは彦七、生

れついて少しばかり精神的にも肉体的にも發育不全といったところがあり、どこもなく人間があまくできていたために、家は裕福だったが同年輩の仲間たちから軽く見られていた。江戸日本橋の分限者として知られた石川六兵衛が町人にあるまじき僭上せんじやうをしたという廉で、江戸十里四方追放の処分を受け、逃げるようにして鎌倉の建長寺の近くに移ってきたのは百年前の元祿のことだったが、彦七はその石川の家につながっていた。瘦せても枯れても六兵衛の一族である。そうはいっても、年はまだ二十の半ばにみたく、三つ年上の女房はいても子どもはいない。仲間たちのように女あそびをするでもなく、辛気くさい学問のまねごとをするしか能がない。ばかにされるだけの理由は十分にあった。

「おや、彦さんが見えないぞ。いままでいたと思つたのに、どこへ行っちゃったのか。」

「おまえがあんなことをいってからかうものだから、やけをおこして泉ヶ谷まで、とぼとぼあるいて行つたんじゃないか。罪なことをしたぜ。」

「まさか。あの乳くさい男にそんな向う意気があるものか。おおかた、かあちゃんか恋しくなつて、こっそりうちへ帰つたんだらう。」

いつのまにか座敷からふつとすがたを消した彦七をめぐる、一座のめんめん、

しばらく冗談口をたたいていたが、やがてそれも酒席のつねとして忘れてしまった。酒がすすみ夜がふけて時刻は四つ半をすぎた。そろそろおひらきにしようかとみなが思っていると、二階の座敷に通じる梯子段を重そうにずしんとひびかせて、足音もそうぞうしく下からあがってくるものがあるので、めんめん、思わず怪訝そうに顔を見合わせた。芸者のひとり立って唐紙をあげると、おびえたような声で、

「あれ、彦さんが……木像を背負って……」

「なに。」

みながいっせいに階段のほうへ目をやると、そこには人間と同じくらい大きな木像を背にして、足つきもあぶなかく、ふらふらしながら立っている彦七がいた。みなあきれて、気を吞まれたようにその場にすわったまま、すぐにはことばも発せられないありさまだった。さきほど彦七をからかった男も、これには身がすぐむほどびっくりしたらしく、いっぺんに酔いもさめはてたけしきと見えた。

そんなことには頓着せず、彦七はずしと廊下から座敷にはいると、こわがって逃げ出した芸者がそれまですわっていた座ぶとんの上に、どしんと木像をおろして安置した。その木像はと見ると、なんとしたことか、あきらかに十王のそれではなかった。地獄に落ちた亡者どもを裁く、見るもおそろしい忿怒の相をした、あの